

高8回 塩澤千秋

新年明けましておめでとうございます。一寸遅すぎるように感じますが、まあ、1月のうちですから受け取っていただけるのではないかと思います。カルガリーはクリスマス後から新年に掛けて氷点下31度という今冬最低気温を記録し10日ばかり続きました。ところが、シヌークと言うメキシコ湾からの温風が吹いてきて気温零度以上の暖かい冬になってしまいました。雪はまるっきり降りません。ロッキー山は真っ白ですが市内はほんの残雪のみです。あり難い様な物足りないような冬です。

先月はこの「ふるさとへの便り」に関して大変嬉しいことが起きました。この欄に投稿させて頂くようになってから、同級生と連絡が取れたり、思わぬ連絡を受け取ったり、楽しいことが随分起こりました。今回はそれにも増して感激する出来事が起きたのです。見ず知らずの方

から、私の書いたことについて、長い長い共感のメールを頂いたのです。それは、2003年1月に書いた「歌えない歌」に対する共感でした。私としては一寸センチメンタルで、日本に住んでいる人達にとっては理解頂けないのではないかと書いて書いたものでした。ところがアメリカに住む方より共感のメールを頂いたのです。共感を頂いたA氏は私と同年代、しかも、1965年（昭和40年）に奥さんと子供1人連れてアメリカに移住した方です。私の経歴と似た所があります。アメリカで大学院を出られて、カルホルニアで現在事業をなさってられる様子、相当優秀であり、苦勞をされた様子が伺われます。メールによりますと、現在 Los Angeles の郊外に住んでお子さん達も立派に成人なさり、豊かな生活を送ってられる様子です。東京出身で、飯田高校の同窓生ではありませんが、やはり「歌えない歌」をお持ちであるという共感のメールを頂き、同じような感じ方をしているのだなと感動している所です。こんな幸せな思いが出来るのも、この欄をお借りして、拙文を發表させて頂いただけの賜物と感謝しています。A氏は同じ北アメリカ大陸に住んでいて、これからもお付き合いして頂けそうな気がしています。

(January 19, 2004)



氷河をわたる風 (27) 渡り鳥—Snow Geese

カナダには三本の渡り鳥のルートがあります。すべてアメリカからカナダの北極圏に達するものです。東部海岸線に沿って北上するルート、西部海岸線に沿って北上するルート、そして大陸中央を斜めに横切るように北へ向うルートです。冬、アメリカの南部で越冬していたスノーグース（白雁）、カナダグース（カナダ雁）、白鳥、多くの種類の鴨、サンドクレーン等々、数知れない渡り鳥が春になると、これらのルートを通して北に向います。多くは北極圏のツンドラ地帯に行つて子育てをします。

大陸の中央部を横切って北のツンドラに向うルートは、わがアルバータ州を通過して行きます。五月中旬から下旬になると、数千羽から数万羽の大きな群れが次から次へとやって来て、アルバータ州の、氷の溶けかけた湖や麦畑に降りてしばらく休憩してゆきます。青い空に整然と編隊を組んで飛ぶ大型の渡り鳥の群れは壮観です。また、氷の解けかけた湖沼や雪の解けた麦畑に餌を探しに来て舞い降りる様子はいくら見ても見飽きないものです。



写真2. 驚いて飛び立った Snow Geese の群れ。羽音と鳴き声と、中々賑やかです。青い空に白い羽がよく映えます。麦畑には去年の落穂が残っています。(1999年4月 Tofield にて撮影)

留学生と連れ立って毎春出掛ける程になりました。これら留学生は、もうもうと土煙の上がる農道をドライブして、鳥の群れを追いかけるのに往生したことを、会うたびに、今でも話します。毎年、ほぼ同じ時期に、同じ場所に来るのですが、広い畑の中ですので餌場はあちこちにあり、鳥に会えな



写真1. 麦畑で餌を啄ばむ Snow Geese (白雁)。やっと近くまで近づけました。真っ白な身体が畑の中で目立ちます。群れている所を遠くで見ると、残雪のようです (1999年4月 Tofield にて撮影)

カナダに来た最初の春に、日本人二世の研究者に、こんなところに連れて行ってもらって以来、病み付きとなりました。春になると落ち着かなくなり、色々と情報を集めたり、鳥の着陸予定地に何度も出掛けたりして、ベストのシャッター・チャンスを狙いました。終いには、日本からの



写真3. 飛翔する Snow Geese。翼の先が黒くなっているのがお分かりでしょうか。地上で翼をたたんでいる時にはこの黒い色は見えません。

いこともあります。農道に止まって鳥影を探します。うんかの如く沸き立っている時もあります。畑で静かに餌を食べている群れもあります。気が付いたら、猛烈な羽音を立てて空に舞い上がってしまい、折角のシャッター・チャンスを逃したこともありました。

これらの鳥は十日ばかり滞在して、北へ行くエネルギーを得ると、氷河の風に乗って旅立ってゆきます。

守ってね—契約に対するギャップ

これは古い話、イスラエルからアメリカの大学に移った頃のこと、日本からの留学生が増え始めた頃のことです。日本企業も力が付き始め、会社からアメリカの大学への留学生が目立ち始めていました。そんな頃の話は、今は昔のことかも知れません。

私がアメリカに移ったのは、イスラエルでの奨学金が切れ、日本へ帰りたくなかったので、自力で稼がねばならなくなったからでした。そんな折、アメリカからサバティカルで来ていたB教授がたまたま同じ部屋を使っていました。微生物学の分野では良い研究をしていて、本も書いていたので、日本でも名前が知れていました。その教授がアメリカに帰ることになって、研究室でお別れパーティーが開かれました。教授は手持ちの高級アルコールを総て持ってきて、皆に飲ませてくれました。今まで飲んだこともない上等はブランディーに酔っていい気持ちで居た折、教授が傍に来て、「お前、来年からどうするか」と聞かれました。「行く所がないんです」と言うと「じゃー、俺の所へ来い」とたちまちにアメリカ行きが決まってしまったのです。

イスラエルからの渡米手続きも順調に進み、ワーキング・ビザもテル・アビブのアメリカ大使館で比較的短時間に取れました。富んだ国アメリカは今とは違いとても大らかでありました。こんな準備をしている間に気が付いたら、イスラエルのビザが切れていました。初めての事でしたので、青くなり、研究所に出張して来ている政府の事務所に行ったら、いとも簡単に、出国の時罰金を払えばよいと言うことで一応安心しました。

次は航空会社の選択でした。当時もイスラエルに出入りする旅客機は、イスラエルと仲の悪かったアラブ諸国のテロの対象となっていましたから、航空会



写真1. 冬の初めのボー川。市の北端です。夕暮れの中での鉄橋はカナディアン・パシフィック、この先ロッキー山脈を越えた1000 km先にVancouverがあります。川は凍結前、市の真ん中を流れて行きます。(2001年12月撮影)

社の選択は非常に重要でした。イスラエルから出る一番安全な飛行機はイスラエルのエル・アルでしたのでそれを選びました。搭乗前の安全性のチェックを非常に厳しく行っていました。個室に入れられ、荷物の中身、ボディーチェックなど厳重に調べられ、カメラのシャッターまで押させられました。当時、多くのハイジャックがある中で、アラブテロの標的に最もされやすかったイスラエル航空が、一度もハイジャックされなかったのは、この厳しいセキュリティーチェックによるものと思われます。パレスチナ問題、アラブ諸国との関係などから、今はもっと厳しいチェックが行われていることでしょう。



写真2. 雪の後、近所の子供たちが雪達磨を作り始めました。こちらの雪達磨は三段です。冬の初めはこんな遊びも出来ますが、寒さが本格的になると、雪がさらさらになって雪を固めることが出来なくなります。(2001年12月撮影)

費を払うと言う契約を文書で結んであったのです。ところが、彼が到着して数ヶ月経つのに会社は一向に送金してこないのです。そこで教授は契約の履行を課長さんを通して迫ったわけでした。ところが、言葉の問題で埒が明きません。そんな訳で通訳として狩り出されたわけです。

当時、日本国内では大きな会社でも文書による契約が余り使われていなかったのでしょうか。アメリカでは小さな雇用でもしっかりと条件を示した文書に互いにサインして契約をとり交わしました。この研究所に入る時も、給料、休暇、保険、雇用期間、また研究結果の所属、守秘義務など細かい条件を示した契約書に教授と私でサインし、お互いにコピー一枚ずつを保存しました。カナダで大学に勤めた時も同じでした。もしどちらかが契約を履行しなければ、これに基づいて抗議することが出来、必要ならば裁判に持ち込むことが出来るのです。後ほど日本の会社に勤めた時には、履歴書の提示は求められましたが、このような契約書は交わされませんでした。そして、雇われてから会社の勝手に随分自由に給料や条件が変えられたことを覚えています。現在はきっと変わってきていると思いますが、日本は契約の国ではなかったのです。

休話閑題。このようにしてアメリカに渡りましたが、研究室について最初にさせられたのが、教授と日本留学生の喧嘩の通訳でした。私より少し前に、日本では五指に入り、またイニシアルで示しても直ぐ分かってしまうような、日本の大製薬会社から派遣された留学生が来ていました。課長さんでした。まだアメリカに着いたばかりで、込み入った話になると英語では難しかったようです。私自身それ程の語学力がなく、教授と課長さんの喧嘩の通訳は随分な苦勞でした。

何故喧嘩になったかということ、会社が文書で交わした契約を守らなかったからでした。この課長さんを教授の所に留学させるに付き、給料と研究

この課長さんにはアメリカに着いたばかりに随分世話になりました。とても良い人で、自動車を買う前に買い物にドライブしてくれたり、自動車免許修得でも随分世話をしてくれた恩人でした。会社はいくら教授にせつつかれても、また、直ぐ傍の大都会まで上司が来ているのに会うこともせず、契約を無視するものですから、終いには、課長さんには、給料は払わない、研究はさせないと言うことにまでなってしまいました。誠に気の毒でした。何のためにアメリカまでやって来たのか分からなくなりました。あんな大きな会社に、文書によって行った契約履行の習慣がなかったのだろうかといまでも不思議です。文書で取り交わした契約は履行するしかなく、もし不履行の場合は相当の罰則を覚悟しなければならぬのがこの国の行き方です。だから、うっかりと契約書にはサイン出来ないのです。日本でも勿論借金の保証人になってうっかり判こを押したお陰で丸裸になったと言う話があります。しかし、こちらではもっと細かいことでも。日常茶飯事のことでも契約書を交わしサインします。

この教授は私にとっては大変優しく、色々と世話を焼いてくれた先生でしたが、課長さんには随分嫌な先生であったようでした。それは、会社に契約を履行する意志がなかったからでした。裁判にでも持ち込まれたら散々な目に合わされたでしょう。同じような経験を私の知人から聞いた事があります。それはもっとビジネスに結びついたことでした。

その人の会社の社長さんは格好の良いことが好きで、自分が大きく見えることや、気前の良いことを見せられる場面はいつも自分が演じて、その後始末を社員にやらせると言った人のようです。私の知人はそんな社長さんの下で働いていました。その社長さん、アメリカの会社と医療器具開発研究で契約を結びました。それが相手にとってとてつもなく良い条件でした。社長さんは良い顔になって帰って来たのでした。ところが、その一ヶ月後、自分でも少し良い顔を過ぎたと思ったのでしょうか、部下であった私の知人を捕まえてその契約を縮小または破棄してくるように言いつけました。サインしたばかりの契約です。相手の会社は大変驚いたようです。間に入った会社の人也大いに困惑したようでした。しかし、最も困ったのは一ヶ月前に結んだ契約を変更ないしは破棄してくることを命じられたわが友でした。

相手の会社は怒ってしまって、裁判に持ち込むと言う所まで行ってしまったようです。アメリカの契約主義の世界からすれば当たり前のことです。自分で良い所ばかり演じて、後の難しい問題の解決は部下に命じる社長さんに嫌気がさして私の知人は会社を辞めてしまいました。だから後どうなったか知りません。きっと手ひどく弁償させられたのではないかと思います。



写真3. ボー川の岸にある灌木に吹雪の後、べた雪が張り付きました。冬の間には一輪の花もないカルガリー、その代わり、こんな花が咲き誇ります。(2001年12月撮影)

安政の世に不平等条約と知りながらサインをしてしまった日本が、それを長い間変更することが出来ず、その条約を実行させられたと言う苦い経験があるにも関わらず、私が外国に出たばかりの日本人は契約と言うことに、歯がゆいほど不慣れでした。今はこうしたことになれた専門家が増え会社もそんな人たちを雇ってうまく運んでいると思います。だから外国との契約はうまく運んでいることと思います。しかし、国内においては、個人契約にはまだ文書が用いられず、特に雇用における契約は、会社の帳簿には記録されているでしょうが、本人に対しては、昔のままの口約束ではないでしょうか。